

2014年6月14日、第26回日本ジェイムズ・ジョイス協会研究大会が開催されます。会場は法政大学55年館となります。プログラムは別紙の通りです。ご出欠調査ハガキを同封しましたので、5月中の投函をお願いいたします。今回、各発表要旨のほか、ダブリン留学中の小林広直さんにコラムをお寄せ頂きました。

Topics

- 第26回研究大会
 - ～研究発表要旨、シンポジウム梗概～
 - ～懇親会について～
- コラム——Open the book, read aloud and then shut your eyes——小林広直
- 事務局からのお知らせ
- (別紙) 大会プログラム

第26回研究大会 研究発表要旨、シンポジウム梗概

1. 研究発表（発表順）

(1) 'All the Lonely People': Joyce's *Dubliners* and the Songbook of Paul McCartney Martin Connolly

Whether or not the result of direct influence, the songbook of The Beatles –and of Paul McCartney in particular– offers what might be interpreted as intriguing ‘variations on a theme’ of some of Joyce’s stories. We will focus on three songs in particular, and examine elements which recall or provide resonant echo of some of Joyce’s stories. We will also look at how acquaintance with these songs may help to aid modern readership toward an understanding of the particular character of Joyce’s *Dubliners*.

In ‘Eleanor Rigby’ (from the 1966 album *Revolver*), McCartney explores avenues of experience and outlook which are similar in a number of ways to what we find in Joyce’s *Dubliners*. The song operates on various levels, not least the symbolic, with a narrative which seeks to expose, as Joyce often did, the ultimate failure of religion, and other societal norms, to provide joy or comfort to those in need. The song’s haunting refrain –‘All the lonely people’– might be read as the background music to the volume as a whole.

The eponymous heroine –a tragic spinster– can also be seen, in some ways at least, as a modern-day incarnation of Maria, from ‘Clay’.

‘For No One’, from the same album, recalls ‘Eveline’ in describing the death of all romantic impulse. The song also provides an uncanny echo of the ending of ‘Eveline’ in the use of the phrase ‘no sign of love’, as either an unconscious or deliberate borrowing from Joyce. Another song, ‘She’s Leaving Home’ (from *Sgt Peppers Lonely Hearts Club Band*, 1967) provides a fitting parallel to the main narrative of ‘Eveline’: both seek to capture the inner tensions of their respective heroines, and as such illustrate a shared ability to access female sensibilities.

We will explore the extent to which these songs, and others, can be deemed re-imaginings of Joyce’s creations, but also how familiarity with these songs may help to provide a way into the sometimes dark and difficult psychology of Joyce’s characters. The practical value of this exploration may lie in the extent to which McCartney’s songs can function as a teaching tool within the classroom. Students often struggle not only with the cultural and historical contexts of *Dubliners*, but simply with its apparent negativism. Yet, many of the aspects of this negativism are also present in the above-cited songs of Paul McCartney: feelings of alienation, of angst, anti-romanticism, disappointment, disillusion, and –importantly, if we are talking about Joyce– the abject failure of religion. Acquaintance, therefore, with McCartney’s songs may help to enlighten the difficult psychology and outlook we find in stories such as ‘Clay’, ‘Eveline’ and no doubt many more. This study is undertaken with the hope of shedding light on the special world Joyce created in that volume, providing a new access point for students and readers. A lover of popular music himself, surely James Joyce would approve.

(2) ジョイスの作品における図形及び幾何学の意味

上條 裕佳

ジョイスの作品には図形及び幾何学に関する内容がいくつか登場する。それらの本来の意味と作品における意味について述べるのが本発表の目的である。

『ユリシーズ』の第 15 挿話に三本脚のマン島の紋章が登場する。マン島の名前はケルト神話のマナナン・マクリールに由来すると言われ、マナナンは島の最初の人間でその三本脚で車輪のように濃霧のなかを移動したと言われている。更にフロイトの夢の象徴ではマン島の紋章は男性の性器を意味している。これらの解釈からマン島の三本脚の紋章は、モリーとの密会のために度々馬車に乗って登場するブレゼズ・ボイランを想起させる。

『ユリシーズ』に ‘parallax’ という言葉が登場するが、天文学で使用される言葉で遠くの天体を異なる位置から観測したときの角度の差の意味で、その角度の差から天体までの距離が算出できる。ブルームは天文学に関する本を持っておりこの言葉を思い出すがその意味をはっきり理解していない。しかし、‘parallax’ には近くのものを見るとき両眼の微妙な角度差から脳が距離や立体感を把握する機能の意味もあり、第 3 挿話の最初に登場する「視覚の避けがたい様態：目を通した思考」そのものである。第 12 挿話に登場する市民は『オデュッセイア』に登場する一つ目の巨人キュクロプスに対応すると言われている。目が一つでは ‘parallax’ の機能が働かないので、市

民のものの見方や考え方が一面的で真実を捉えていないことを想起させる。また、この挿話は主と副の2つの語りで構成されており内容が立体的で豊かになっている。この構成は‘parallax’の後者の意味を想起させる。

*Dubliners*の短編“The Sisters”に登場する図形‘gnomon’は、平行四辺形からその一角を含むそれに相似な平行四辺形を取り去った残りの図形である。取り去られた平行四辺形を亡くなったフリン神父に、残りの図形‘gnomon’を少年に対応させて解釈すると‘gnomon’が元の平行四辺形と形が異なることから少年がフリン神父の死によって彼の強い影響力から解放されたものと解釈できる。

以上のようにジョイスの作品は図形及び幾何学に関する表現が使われているのでジョイスの作品をこれらの意味から解釈した結果を報告する。

2. シンポジウム 1

ジョイスとvampirism

講師 桃尾 美佳（兼司会）／田多良 俊樹／滝沢 玄／横内 一雄

模倣と反復——“Counterparts”に見る vampirism

桃尾美佳

ジョイス作品にゴシック的特徴が見られることはしばしば指摘されてきたが、本シンポジウムではこれまであまり包括的に取り上げられる機会がなかった「吸血鬼」という問題を取り上げる。Stephen による吸血鬼詩を始めとして、ジョイス作品に散見される吸血行為や血液にまつわるメタファーがどのような解釈可能性を秘めているのか、各発表者による多角的なアプローチを通じて迫ることを目標とする。桃尾の発表では *Dubliners* からコピーの反復再生産を要請する世界が生み出す抑圧と不安を描く“Counterparts”を取り上げ、同じく模倣と反復を主題とする Bram Stoker による吸血鬼小説 *Dracula* と対照させて、vampirism との関連性の検証を試みる。抑えがたい渇きのために夜の街を渴望する Farrington に、墮落した吸血鬼の姿を読み取ることは可能だろうか？作中に潜む模倣と反復の構造を精査することで、ジョイスの描くダブリンを吸血鬼的世界として読み直す可能性を考えてみたい。

牙を剥く Joyce — Stephen の吸血鬼詩の counter-vampirism

田多良俊樹

Stephen Dedalus が「プロテウス」挿話で構想し、その後「アイオロス」挿話で内的独白する詩句が、Douglas Hyde がゲール語から英訳した“My Greif on the Sea”を元ネタとしつつ、Bram Stoker が *Dracula* で描いた「吸血鬼」のモチーフを含んでいるのは、一体なぜなのか。

本報告ではまず、Stephen、Hyde、Stoker の作品を比較し、先行作品を引用する行為自体が、

いわば文学的な「吸血行為」であることを指摘する。次に、Hyde の *Love Songs of Connacht* が、*Ulysses* のテキストにおいて、あるいは当時のコンテクストにおいて持ち得た政治性を鑑み、Stephen の吸血鬼詩が、アイルランド（人）を吸血鬼化する文化ナショナリズムを標的にしている可能性を追究する。帝国主義を模倣して支配と搾取を内的に反復する民族主義の vampirism に対抗するために、民族主義的知識人に牙を剥くこと——本報告は、そのような Joyce の（反）吸血行為を捉える試みである。

Bloody Blessed Blooming — *Ulysses* における血の犠牲

滝沢 玄

Richard Ellmann は *Ulysses on the Liffey* (1972)において、Joyce は *Ulysses* 第 18 挿話で Molly Bloom のメンスを聖別していると論じ、それによって第 1 挿話冒頭のミサ（のパロディ）に捧げられた聖杯の血が止揚されることも示唆している。この血液循環のアナロジーは、いかにも *Ulysses* に相応しい。また聖餐式と生理の対比がもたらす価値の転倒は、古代から神聖視される一方で嫌忌されてきた、血の両義性に注意を喚起させる。Vampirism のテーマに対しては斜めのアプローチになるが、上記以外にも医学から妖婦(vamp)まで、文字通りあるいは象徴的に、血が流れ何かの犠牲が生じる行為を *Ulysses* のテキストに見出し、可能な限り吸血のメタファーを探ることにしたい。

愛の憑在論—*Finnegans Wake* における vampirism

横内一雄

ジョイスの vampire への執着は、*Chamber Music* に始まり、*A Portrait of the Artist as a Young Man* を経て *Ulysses*、*Finnegans Wake* へと至るまで、一貫してロマンティックな愛を語る時に現れるように思われる。例えば *Chamber Music* 第 31 番では、恋人が与えてくれたキスの甘さが主題化される一方で、頭上には蝙蝠が飛び交いその女性が吸血鬼かもしれないというかすかな警告を差し挟む。*Wake* でも、とりわけ第 2 部第 4 章のトリスタン挿話においてキスが主題化されるが、その背景に吸血鬼の主題が取り憑いている可能性についてはあまり論じられていない。本報告では、少し回り道をして、作中唯一 Bram Stoker の *Dracula* への明白な言及が埋め込まれている第 1 部第 6 章の一節を精読することを通して、*Wake* における vampirism の主題を明らかにしてみたい。そして最終的には、この主題が孕む政治的含意についても考察を広げてみたい。

3. シンポジウム 2

Dubliners の 100 年

司会 奥原 宇 / 講師 福岡 眞知子 / 河原 真也 / 須川 いずみ

今年にはジョイスが *Dubliners* を出版して 100 周年にあたります。出版に至るまでの苦労はジョイス自身が多くを書き残していることもあり、よく知られているところですが、出版者（印刷業者）から削除や修正を求められた語・句を考えるとまさに隔世の感を禁じ得ません。

詩集 *Chamber Music* を 1907 年に出版していたものの、*Dubliners* はジョイスが出版した最初の小説（集）と行うことができるでしょう。そこで、本シンポジウムではこの作品の出版後 100 年に亘る受容の歴史を踏まえつつ、いくつかの切り口から再検討を加え、そこにダブリンあるいはアイルランドの国と民がどうとらえられているか、あるいはジョイスの他の作品へどのようにつながっていくのか等を考察し、今後の *Dubliners* 研究への新たな洞察の手がかりが提供できればと念じています。福岡講師は *Dubliners* を象徴主義との関わりで見直し、河原講師は ‘The Dead’ を中心に歴史との関わりを、最後に須川講師が映画化された *Dubliners* 中の短篇を手がかりに論じます。（奥原 宇）

James Joyce, *Dubliners* に見る象徴主義からの離陸

福岡 眞知子

19 世紀末にフランスで盛んになった象徴主義には、James Joyce も多大の影響を受けていた。ヴェルレーヌを訳し、Arthur Symons の *The Symbolist Movement in Literature* (1899) を読み、1903 年にはパリでシモンズに直接会い、ジョイス自身が象徴主義詩人のひとりになりかけていたほどだ。

確かに、象徴主義をひとつの文学的な拠りどころとする段階があり、*Dubliners* (1914) にも *Ulysses* (1922) にも象徴主義芸術の手法、概念、方向性などが反映し続けていく。時に *Ulysses* が象徴主義の影響を受けた作品の代表として挙げられるのも、うなずける。

しかし、ジョイスは、単にボードレー、マラルメ、ヴァレリーなどの模倣に終始することなく、観念を表象で表しただけではない。意識と無意識を言語化し、認識の段階を言語で表現するという難業を、早くも *Dubliners* で開始している。*Dubliners* には、象徴主義を吸収しつつそこから離陸していく彼の道筋が見て取れる。そのことを、Boeninger (*Joyce Studies Annual 2013*) なども踏まえながら、‘The Sisters’、‘After the Race’、‘Two Gallants’ などから検証したい。

これは、ジョイスの文学的な位置を再確認する作業のひとつになるはずである。

カトリック・インテリゲンチヤの台頭と「近代性」への目覚め —アイルランド史に翻弄されるゲイブリエル

河原 真也

19 世紀後半以降、カトリック信徒の待遇が劇的に向上するにつれ、多くのカトリック系知識人が台頭し、アイルランド文芸復興をアングロ・アイリッシュ系知識人とともに支えていた。‘The Dead’ のゲイブリエルもまたそういった知識人の一人としてみなされるが、一方でアイヴァースが信奉するアイルランド語復興や、妻グレタの出身地で、当時のナショナリストたちが理想化した「西部」にはあまり関心を寄せていない。このようにアイルランド文化の特異性を蔑むという、「伝統的知識人」とは立場を異にしていたゲイブリエルの姿を、ジョイスはどのような意図でもっ

て描いたのであろうか。カトリック信徒の子女に高等教育への門戸を開こうとした ‘The University Question’ の解決が求められる中、ゲイブリエルのような「近代性」を指向するカトリック系知識人が誕生しつつあった背景と、歴史に翻弄され続けていた彼らの苦悩について、他の短編にも触れながら、一考察を加えてみたい。

Dubliners と映画

須川いずみ

今年は *Dubliners* 出版センテニアルなので、その影響で *Dubliners* 関係の本の出版が行われているが、映画の方も何故か米国を中心にいくつか *Dubliners* を原作にした短編映画が制作されつつある。大会までにその辺を手に入れるのは難しそうであるが、今までにも数本 *Dubliners* の短編映画があり、舞台化されたものもある。私自身はジョイスとボルタ座関連を調査する機会に、ロンドンのアーカイブセンターでテレビ放映されたジョイス作品の映画化されたものを観ているので、知る限りの *Dubliners* の映画や舞台について述べたいと思う。また、*Dubliners* における映画的要素を追いながら *Ulysses* との関連を考察してみたい。

懇親会について

大会終了後には懇親会が行なわれます。会場は、同じく法政大学55年館の2階教職員食堂となります。懇親会費はドリンク込みで 3000 円です。事前にお振込みください。多くの方々のご参加をお待ちしております。

~~~~~コラム~~~~~

Open the book, read aloud and then shut your eyes.

小林広直

2013年9月からUCDの修士課程(Anglo-Irish Literature & Drama)に留学させて頂いています。奇しくも成田空港に向かう道中で、Seamus Heaneyさんの訃報を南谷奉良さんからのメールで知り、8月31日ダブリンに着くなり、空港のnewsstandにある新聞をすべて買いました(どの一面も国民詩人の死(Death of a national poet)を悼んでいました)。7年前、奇跡的な幸運からご自宅にお邪魔させて頂いたヒーニーさんのことを懐かしく思い出すと共に、烏滸がましくはありますが、その死が偶然にも私のダブリン到着と重なったことに、自分の文学研究にとっての新たな出発点として捉えずにはいられませんでした。

現在 Churchtown のとあるお宅にホーム・ステイしているのですが、その奥様の元ご主人は Mick O'Dea さん、なんとあの Micheal O'Siadhail さんのご友人にして、*Love Life* (2006)や昨年出版された *Collected Poems*(2013)の表紙の portrait を描かれた画家であることがわかり、清水重夫先生が訳された『愛のくらし』の書評を凶書新聞で担当したご縁もあり、何より埼玉県のにがない（しかし愛すべき）ベッドタウン出身の私にとって、「村」としてのダブリン（勿論よい意味での）を再認識する、まさしくジョイス的 encounter あるいは coincidence を体験しました。

MA の学生は全員決まった授業を 1 学期につき 3 つ受講します。Joycean であるということを言い訳にジョイス（論）ばかり読んできた私にとって、アイルランド文学全般への知識を広げる大変よい機会になっています。

後期では各授業 2 名ずつの先生方が担当され、月曜日は Anne Fogarty 教授&Luca Crispi 博士による Joyce, *Ulysses* で、各挿話の再読と課題の先行研究を読むのに毎週日曜日は手一杯です。私の修士論文の指導教授でもある Luca 先生は（つい最近になってようやくメールで Call me Luca とありました）いかに『ユリシーズ』を読むべきか、という非常に大きなテーマを、主として文体やジャンルという観点から扱われ、毎回新たな発見があります。

火曜日は Frank McGuinness 教授&Tony Roche 教授による Irish Theatre: European Connections で、チャーホフやツルゲーネフ、イプセンなどのヨーロッパの劇作家をどのようにアイルランド現代演劇は受容してきたのかという adaptation の問題を扱い、とりわけ Brian Friel と Tom Murphy を読んでいます。トニー教授はご自身の観劇体験や当時の逸話(anecdote)を織り交ぜながら、フランク教授は作家としての立場から「強度のある」お話しをされるのでノートを取らずにじっと聴いていたいという想いに駆られます。

水曜日は Margaret Kelleher 教授&PJ Mathews 博士による Before / After the Revival で、アイルランドの近代／現代文化を様々な角度から概観しています。ケラハー教授は Famine や feminism、bilingualism について、PJ さんは popular culture や revisionism、Irish music について、それぞれの関心と最新の研究動向に基づく実に刺激的な、個人的には最も好きな授業です。また、毎週水曜日は James Joyce Centre の一室で開かれている FW の勉強会に、UCD の博士課程に在籍中の小野瀬宗一郎さん、平繁佳織さんと共に参加させて頂いています。メンバーの半数が日本人といういささか奇妙な状況です。

英会話の苦手な私にとって、それでも授業は毎回大変ですが、アイルランドの汲み尽くせない魅力（とりわけお酒？）に溺れつつも、何とか 8 月まで survive できるように、そしてこれまで多くの先生や先輩方から受けたご厚意に対して恩返しができるように、精進したいです。最後に、ある日の日記に書いたアルバイト先の international school での「ある出会い」を recycling して、滞在記を終えたいと思います。

*

2013 年 12 月 6 日。I'm studying James Joyce——私が拙い発音でそう言うと、この街で返ってくる反応はおおよそ以下の 3 通りである。①素直にびっくり感心してくれる②さしたる興味はないとばかりに話題をやんわり変える③こちらのことはお構いなしに自身のジョイス体験を蕩々と語り始める。

今日出会った老先生はまさしく 3 番目のタイプである。驚くほど小柄で、皺だらけ、草臥れたスーツではあるがどことなく

現大統領 Michael Higgins を思わせるその男性は、どうやら「国語」の先生らしく、ジョイスがいかに自分の人生において重要であったか——あるとき授業で *FW* の冒頭のページを解説したんだけどね、とか——を熱弁するのだった。目の悪かったジョイスにとっては、ホメロスやダンテよりミルトンが大事であるというのがその先生のご意見で(なるほど)、最後に彼は両手を広げて、やや芝居がかっていると思えなくもない調子で私に言った。「本を開けたら、声に出して読む。そして目を閉じるんだ」

事実、予習や締め切りに追われる毎日であって、音読は疎か、目を閉じて味わう余裕はなかなかない。それは研究者の宿命でもあるわけだが、やはり文学研究は、楽しみ味わうことがその根底にあるはずで、この老先生の言葉が耳を離れないのはそのせいなのだろう。それに、かのステイーヴンくんも言っているように(“Shut your eyes and see.” (U3.9))、目を閉じなければ見えないこともあるのだ。

折しもその夜、道木一弘先生からメールを頂き、「特定秘密保護法案」なるものが可決されたと知らされ、久しぶりにインターネットの news に釘付けになった(standstill)。今の私たちには、文学作品をじっくり味読するなどと、悠長なことを言っている場合ではないのかもしれない。しかし、いかに「ふるさは遠きにありて思ふもの」であろうと、この悪法には目をつぶるわけにはいかない、と思う。(2014年3月20日記)

事務局からのお知らせ

今年の IASIL の大会は、10月11日～12日、早稲田大学での開催となりました。ゲストには Fintan O'Toole さん (*Irish Times* 文芸コラム担当でジャーナリスト) と Anne Fogarty さんをお迎えします。ジョイス関連のパネルも行なわれる予定です。詳細は後日ウェブサイトでお確かめください。

毎度のお願いとはなりますが、会費・懇親会費は、協会の口座に振込みをお願いいたします。振込用紙を御利用の場合は、郵便局や金融機関に備え付けの用紙をお使いください。恐れ入りますが振り込み手数料は会員の皆様に御負担頂いております。ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合、下記になりますので御注意ください。

- 銀行名：ゆうちょ銀行 ■金融機関コード：9900 ■店番：048 ■預金種目：普通
- 店名：○四八店（ゼロヨンハチ店） ■口座番号：0185454

住所変更をされてこの Newsletter が転送で届いた方は、お手数ですが右記事務局宛にお知らせください。(e-mail可)

日本ジェイムズ・ジョイス協会 事務局

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2

群馬大学教育学部

吉川信研究室内

メールアドレス: sean_jjsj_since08june(at)ybb.ne.jp

ゆうちょ銀行 口座番号: 記号 10430 番号 1854541

(名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会)